



山口運河とオタルナイアイヌ

小樽市総合博物館歴史文化調査会

—本年度講座の締めくくり—

竹内 勝治 氏

手稲の地続き隣、銭函にお住まい、山口運河の研究調査を手がけた先生（小樽市博物館紀要「銭函花畔間運河の消長」2005. 3. が有名）親しみ深い語り口、7月の運河視察者も多く印象深い話だった。

始めに運河の名前は、設置者の開拓使は「銭函・花畔間運河」と呼んだという。したがって「山口運河」は地元区民の通称で、区の部分復元・保存工事で「山口運河まつり」の愛称として、また、シンボルとして定着し、地域活性化を産み出していると考えられる。

構想は明治2年～4年開拓使内部で考えられ、明治25年(1892)第4代北海道庁長官北垣国道(明治25～29年)により「十二年計画」で「鉄道、港湾、排水運河、道路」が急を要するとされた。

- ・ 運河の目的は、①物資輸送 ②排水 ③灌漑 ④水力利用
 - ・ 設計は札幌農学校助教授岡崎文吉技師。 明治28年着手、30年完成。
 - ・ 明治34年に通船、1,450隻、貨物5万5百個の利用だった。札幌まで8時間、人が曳いたという。
- だが、冬は積雪で埋まり、7～8年で排水利用が主になった。
なお手稲と小樽アイヌの生活、交流については現在まだ不明な点が多いという。



「銭函・花畔間運河」の計画図 ▲



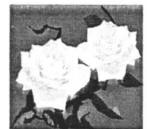
山口運河まつりで舟に乗って ▲

会員研究発表

山口運河見学後の考察

・ ・ 治山、治水は政治の原点 ・ ・

中山 恒雄 会員



古来より文明の発達するところにはかならず川が存在しました。それは単に生活用水としてのみならず、流通のための水運の必要性があったことなどを、判り易く講義してくださいました。

治水は戦国時代後期から建築用資材を運ぶためにすでに活用されていたということです。

江戸時代に至っては、関東圏において相互に離れた地域の、今でいうところの特産物(?)の交易も可能にしました。あらためて当時の人々の知恵に驚くばかりでした。併せて江戸時代のリサイクルのお話は大変興味深いものでした。

下肥にも松竹梅があった！ 武家、庶民、牢屋の罪人では食事が違うから？それで野菜の生育も違ってくる？ 合点！

30周年記念誌相次いで発行

“稲山”（平成19. 10. 13付けで、稲山連町30周年記念誌）

当会の平木重男さんが編集委員長として、編集されてきました地域資料が満載という労作です。古くから樽川通り、稲山通りに面した一角であり、終戦時には拓北農兵隊の皆さんが御苦労された入地先、ホクレンの歴史とつなげて大事な手稲史に位置づけられそうです。

平木さんは、膨大な自分史の草稿も用意されています。陽の目を見て、私どもの生きる指針にさせて頂きたいと思います。

“思い出で綴るほまれの30年”

（平成20. 1. 31付けで、ほまれ町内会創立30周年記念誌）

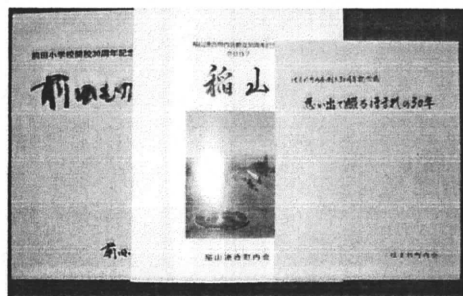
手稲鉄北小や区役所と隣り合わせの町内会です。

急きよ、この一年間で脱稿したとは思えない編集ぶりで、地域の発展が手に取るようにわかります。昭和40年の鉄北小開校以来のきめ細かい年表は貴重なものです。

“前田ものがたり”

（平成20. 2. 10付けで、前田小学校開校30周年に、旧職員の会より関係者に配布されました）

牛が寝そべる原野に鉄北小から分家した小学校です。学校の30年が即、下手稲通り繁華街の盛衰と重ね合わせられそうです。



発行された記念誌 ▲

<広報担当から>

この会報を手にする頃にはいちだんと暖かくなり、さらに春めいていると思います。

今年も定例会での講義に加え、研修視察、親睦会などの行事が計画されています。体調を万全にして、ぜひ全日程を共に楽しみたいものです。

ところで昨年、一ノ宮さんのお話しに登場した、大きな板に達者な文字で書かれた、今から約百年前の「中学生の日課表」ご記憶でしょうか？イチロー顔負けのハードな目標目安です。

最近の新聞記事によると、2002年にスタートしたゆとり教育の失敗から、小中学校の授業時間が一割増えるそうです。勉強したいというハングリーな気持ちなくして解決になるのか甚だ疑問です。

中学生がその後、海軍大佐になったお話しなどを一ノ宮さんが会報5月号に執筆してくださる予定です。

◆次回研究会のお知らせ◆

○第25回研究会は：5月14日です

・講話：「昭和20年代の手稲の姿と
少年期の思い出」

・講師：石狩市郷土史研究会長

元石狩市内小学校長 村山 耀一氏

石狩市郷土史研究会は、50年の歴史と伝統を持つ会です。昨年の「銭函・花畔間運河」の視察調査では、会員の皆さんと行動を共にしました。今年も石狩、当別方面の史跡などを訪問の予定です。

・会員発表：「手稲山に咲く花」一花とふれあう山道— 発刊について

・発表者： 浜谷 義昭 会員

手稲山は植物の宝庫です。浜谷さんが「山なみ手稲」の会の仲間と共に山を歩き、カメラを向けて集められた労作が、このたび手稲区役所から本となり刊行されました。苦勞し、楽しかったお話しを・・・